

パーティリハーサルのマイクロエスノグラフィ：

ディレクタのワークに照準して*

南 保輔

論文要旨

パーティリハーサルでなにが行われているのか、そのディレクタはどのようなはたらきをしているのか、アセスメントはどのようなかたちを取っているのか、これらの調査疑問を明らかにするために、ある大学の卒業記念パーティのリハーサルを調査した。ビデオカメラを使って2日間のリハーサルを記録した。

ディレクタは、キューシート作成というかたちで意思決定を行っていた。パーティがうまくいくためには複数の人間がその動きを協調して同期させることが必要だが、そのための仕組みとしてアナジリが使われていた。うまくいかなかったときにはやり直しを指示することで、ディレクタのアセスメントが示されていた。失敗が機器の誤作動を原因とするものかの特定もなされていた。これらのワークを通じて、協調の中心を務めるディレクタは、本番では自身の関与を最小限にすることを目指し、つまり中心不在の協調を完成形としてリハーサルに取り組んでいた。

キーワード：意思決定、協調の中心、同期、アセスメント、フレームアナリシス、ワークプレイス研究、会話分析、ビデオ記録

《音楽はじまる》

ディレクタ(以下「ディ」)： いま、これ踊ってま：す。踊ってる踊
ってる踊ってる。踊ってる。で：：：、これが2分半踊るんで。
で、ダンスが終わりました。

《音楽とまる》

ディ： で、この、でまあ、ここで拍手おねがいしますみんな。

《みんなが拍手する》

ディ： で、拍手してると同時にあの：BGM 3を。

《音楽始まる》

ディ： で、チアははけてください。

《チアの代役5人は舞台下手へ歩き出す》

ディ： これが退場曲。

《チア代役の5人目が退場しおわる》

ディ： で、退場しおわたたら、BGM 停止。

《音楽止まって暗転》

1 パーティのリハーサル

リハーサルというのは、興味深い活動だ。「いまここ」でなされていることは、そのときその場で (here and now) の「本物 (real)」として受けとられるわけではない。将来の別の場所 (there and then) の「本番」のために、その準備としてなされている。冒頭に引用したのは、あるパーティリハーサルの断片である。舞台上には5人が立っている。チアリーダーの代役である。「いま、これ踊ってま:す」や「2分半踊る」などとディレクタがマイクを使って言っていることはスピーカを通じて聞こえているが、もちろんチア代役は一瞬たりとも踊りらしい動きをすることはない。ただ立っているだけだ。「ダンスが終わりました」も、踊っていないのだから「終わる」わけがない。

ではこういった「ごっこ (make-believe)」はなんのためのものだろうか。それは、パーティスタッフの練習のためだ。社会学者の Erving Goffman は、リハーサルとは「要するに『練習すること (practicing)』である」と言っている (1974: 59)。パーティ本番では、本物のチアリーダーがやってきて演技をする。そのときに、音楽や照明などが適切なタイミングで始まったり終わったりするようになるためである。

本論は、パーティリハーサルではなにが行われているか。そのディレクタはどのようなはたらき・ワークをしているのか。ディレクタはアセスメントをどのようなかたちでしているのか。このような調査疑問に答えることを通じてエスノグラフィックな記述を提示するものである。

まず、調査対象のパーティとそのリハーサルについて簡単に紹介しよう。都内 P 大学では、毎年3月下旬に行われる卒業式の日の夜に、都心にあるホテルのホールを使って卒業記念パーティを

行っている。2時間の立食パーティである。ステージがあり、ステージ上では学長あいさつなどに引き続き、各種アトラクションが繰り広げられる。本論が取り上げる卒業記念パーティは出席した卒業生が110人あまり、教職員が約20人とわりと小規模なものだった。

この卒業記念パーティを企画実行するのが、P 大学卒業記念パーティ実行委員会の学生たちである。「部員」は各学年10人前後で、合計50人ほどの団体だ。キャンパス内に部室ももっており、文化部や文化サークル同様の感覚で学生は所属しているようだった¹⁾。準備は1年をかけて行われるが、いちばん忙しく力も入るのが具体的なパーティ準備であるリハーサルだ。本論で取り上げる2012年(2011年度)の卒業記念パーティの場合、3月上旬からリハーサルが始まった。

リハーサルはあわせて6日間行われたが、最初の4日は学内の階段教室で行われた。この教室を X 教室と呼ぶことにしよう。X 教室の後ろ半分は階段状になっていて、固定式の机と椅子が設置されている。前方フロア部分は、平らなスペースとなっている (図1)。机と椅子を置いて教室として使えるが、リハーサルのためにこれらは脇に片付けられていた。教室正面にはかなり広い舞台があり、ちょっとした小劇場という作りである。だが、基本は教室なので、照明装置や放送機器はなく、リハーサルのために持ち込まれる。その一方、終盤の2日間のロングリハーサルが行われた Y 教室は、X 教室よりも新しく、放送や照明機材なども完備されていた。

ここで、使用される機材のひとつである「インカム」について説明しておく。この団体でインカムと呼ばれているのは、携帯型トランシーバーのことである。無線の送信機と受信機が一体となっており、イヤフォンで音声を聞くことが多い。よ

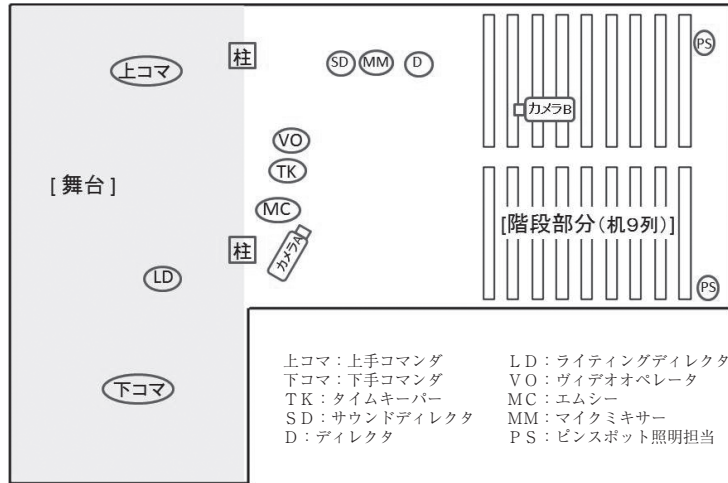


図1 X教室における各分担の配置

く舞台の裏方同士が通信するために使用されるものだ。P大学の学生組織全体で所有しているものを卒業記念パーティのために借り出して使っているが、たまにうまく作動しないことがある。そのために、後にみるように、なにかがうまくいかなかったときに、インカムの作動不良が原因かどうかを確認するといったことがなされる。

さて、卒業記念パーティ実行委員会は、企画局と広報局とに分かれている。パーティを企画実行するのは企画局である。人数も企画局が約30人であるのに対して、広報局は約15人と少ない。広報局はパーティ当日の受付業務などを行う。企画局の部員は、ディレクタをはじめ、上コマ（かみこま；舞台上手のコマング）、下コマ（しもこま）、GM（じーえむ：ゲストマネージャ）、タイムキーパー、ビデオオペレータなどの分担に分かれる。放送関係は、放送部という別の団体のメンバーが務める。サウンドディレクタがトップで、MC（えむしー：進行）やマイクミキサーの役を担う。照明関係も照明局という別の団体が担当する。ライティングディレクタやピンスポット照明担当などの分担がある（図1を参照）。

2 パーティのプログラムと調査方法

卒業記念パーティのプログラムは、大枠は例年決まっている。ただし、年度ごとに多少の変更があり、詳細はディレクタが決める。以下の表1は、2011年度パーティのQディレクタが作成した本番用キューシートからプログラムをリストにしたものだ。そのなかで、調査した2日間にリハーサルが行われたのが、ビンゴと応援団のパフォーマンス（チアリーダー演技と、エールと校歌斉唱）だった。

表1 パーティのプログラム

委員長挨拶
来賓紹介
学長挨拶・乾杯
電報紹介
歓談
フラワーパフォーマンス
歓談
ビンゴ
歓談
チアリーダー演技
エールと校歌斉唱

本論で取り上げるのは、3月中旬に行われたり



図2 カメラBの画像：無人のマイク前にピンスポット照明があたったところ [40:55.18]



図3 カメラAの画像：右からディレクタ，マイクミキサー，サウンドディレクタ [46:44.09]

ハーサル4日目の記録である。ビデオカメラ2台とICレコーダ1台を使って録画と録音を行った。ビデオカメラの1台(Canon HF G10)はX教室後方の階段部分中程に設置した。舞台とその上のプロジェクタ用スクリーン，教室前方平面フロア部分全体，とくに右側に位置する放送部関係者とディレクタ，舞台のすぐ下正面のタイムキーパーとビデオオペレータという，活動のほぼ全貌を捉える位置である(図2を参照)。純正ワイドコンバージョンレンズ(Canon WD-H58W)を付けて三脚に固定とし，操作者は置かずにずっと撮りっぱなしとした。これをカメラBとする。カメラAは，舞台手前の左手，フロア上に設置した(Sony HDR-SR12)。純正ワイヤレスマイクセット(Sony ECM-HW2)を装着し，マイクをQディレクタにつけてもらった。画面はディレクタ中心とした(図3を参照)。こちら

は南がカメラ操作をし，ミーティングのときはアップにしたり，ワイヤレスマイクの電池切れに対応したりした。撮影はいずれのカメラも最高画質モードで行った。その後，AppleのFinal Cut Pro 7.0.3で「Apple ProRes 422」コーデックを用いて変換したのちMPEG Streamclip 1.9.2でMP4に再変換した。分析はこうやって作成したMP4ファイルを基本データとして使用し，音声記録などは補助とした。InqScribe 2.1で文字起こしをしながら分析を進めた。

3 ディレクタのワークと本論の構成

パーティとそのリハーサルのためのディレクタの仕事とはどのようなものか，そのなかでアセスメントはどんな位置を占めるか。これが，本論の研究を始めるにあたっての調査疑問であった。本論は，組織の「リーダー」は意思決定(decision making)をどのように行っているかを知りたいという，南の一連の研究関心の流れのなかに位置づけられる。

ロボットラボにおけるデモンストレーション開発プロジェクト調査(南2011)では，ワーキングチームリーダーである研究員は，チームメンバーの大学院生と話し合いながら意思決定を行っていた。どんなデモを開発するかを，日程や院生の研究進捗状況に基づいて決めていた。開発過程での中間ミーティングにおいては，出来上がりつつあるデモの問題点を指摘して改善を指示し，助言していた。

見いだされたのは，組織研究者のMichael A. Robertoが「戦略的意思決定」の「神話」と「現実」として対比したように，「上意下達」という従来広く持たれていたと思われる組織の意思決定像とはほど遠い姿であった(2005=2006: 38)。たとえば，あるプロジェクトを計画決定したとして

も、それを実現していくには、さまざまな調整や交渉、状況判断が必要となる。紙上の計画を現実のものとし（実現：realize）ていくのには、現実世界のさまざまな活動やワークが必要となってくる。

本論においては、パーティのディレクタというリーダーのワークを詳しく見ていく。卒業記念パーティというひとつのイベントを実行する最高責任者がQディレクタだ。かれがキューシートというかたちで、最終プランの具体的な実行手順を示し、これに沿って多くの人間が協調することによってパーティは実現される。リハーサルはそのための準備、練習である。

4節では、キューシートの分析を通じて、人びとの動きがどのように前もって処方されて（prescribed）いるかを明らかにし、キューシートの作成がディレクタの意思決定のひとつであることを確認する。5節は、「アナジリ」という仕組みに注目する。これは、だれかの発話（「アナウンスメント」）の最後（「尻」）のところで、なにかの操作をするときに使われることばだ。キューシートにはアナジリの指示もあり、リハーサルではその練習が何度かくり返された。

複数の人間がその動きを合わせることは協調（coordination）と呼ばれる。空港の地上管制チームの調査を行った Lucy Suchman は、「協調の中心（center of coordination）」という考えを提出している。飛行機のスムーズな運行のためには、飛行機の機長や、パッセンジャーボーディングブリッジの操作をするランプ作業員、手荷物の積み卸しを行う係など、空間的に分散した人びとの動きをうまく協調させることが必要である。その中心に位置して、無線通信や監視カメラを使って、状況判断とコミュニケーションを通じての指示を行うのが管制チームなのである（Suchman

1996; 1997)²⁾。

本論で取り上げるパーティディレクタの場合、空間的に分散しているスタッフの活動を協調させる中心としてのワークが見られた。なかでもユニークなのは、活動のタイミングを合わせる、つまり同期を取ること（synchronization）である。応援団リーダーが舞台上に登場したところでピンスポット照明があたる、あるいは、応援団長が「エキサイティングフィールド」とかけるかけ声の最後（アナジリ）の「ド」で照明が消えて音楽が始まるといったことが求められる³⁾。

パーティリハーサルにおいては、あるプログラム区分がトラブルなく、うまくできているかが主要関心となる。ディレクタは、うまくいかない場合には同じ部分のやり直しを指示することがある。6節においては、2回のやり直しが見られた部分を取り上げる。やり直しとなった部分とならなかった部分の詳細な記述を行う。

やり直しを指示することは、失敗を含意する。失敗や成功のアセスメント（査定）というのは、組織のリーダーにとって最重要な仕事のひとつである。パーティリハーサルにおいてやり直しを指示するかどうかに、ディレクタというリーダーのアセスメントが示されていると考えられる。7節は、どのような仕組みでやり直しの指示がなされているかを、やり直しとならないときとの対比で分析する。

8節と9節は、音響機器や通信機器といった機材が関連するトラブルとそれに対応するワークを取り上げる。多数の人間が参加するリハーサルのような活動においては、マイクを通じてみんなに聞こえるように発話がスピーカから大音量で流される、あるいは、インカムで一部の人間のあいだだけで通信するといったことが不可欠である。これらの機器は、ひとの声と同じようにただ発声す

れば聞こえるものではない。機器の電源を入れたり、適切なボタンを押して話したりといったことが必要になる。機材が原因でトラブルが生じたとき、それは関与している人間以外には不可視であり、また、関与している当事者にも機材の故障によるものか誤操作によるものかわかりにくい。ディレクターは、失敗があった場合には、その原因を特定するワークを行う。やり直しがうまくいくことを確かなものとするためである。

トラブルはまた、関与しているひとのメンツを脅かす (face threatening; Goffman 1959)。ディレクターはトラブルが生じたとき、とくに、自分自身の不手際でトラブルを生じさせたときには、それによって信頼を失った (discredited; Goffman 1963) 人間に謝罪することで、メンツ喪失の埋め合わせをして志気低下を招かないように配慮していた。9節はこのやりとりを、人間関係のワーク、とくに配慮ワークとして取り上げる。

4 キューシートとアナジリ

ディレクターの重要な仕事のひとつがキューシートづくりである。たとえば、図4はQディレクターのキューシートの一部分である⁴⁾。「15'00" (開始後15分00秒)」から始まる「学長挨拶・乾杯」と続く「電報紹介」の部分である。キューシートはこのように、行ごとに「プログラム」が入る。

キューシートは9列ある。まず、「T. time」という全体の時間 (total time) を示す列がある。

つぎが「プログラム (Program)」である。そして、「P. time」として、そのプログラムにかかる時間 (Program time) が示される。4列目以降は、「サウンド (Sound)」、「エムシー (MC)」、「マイク (Mic)」、「舞台上のアクション (Stage Action)」、「スタッフアクション (Staff Action)」、「照明 (Light)」となっている。

6列目の「マイク」では、どのマイクをだれが使うかが示される。使用するマイクの番号が①から⑤まで割り振られている。たとえば、「学長挨拶」のときには、司会進行を務めるMCの2人がマイク①とマイク④、そして学長がマイク⑤を使う。そのマイクの配置が「ステージアクション」列に図示されているというわけだ。左下すみに示されているように、MCの2人が演壇の前に立って2本のマイクを使う。ステージ中央のマイク⑤を使って「学長挨拶」が行われるというわけだ。

残りの4列を説明するには、業務分担と技術用語の解説が必要となる。8列目の「スタッフアクション」列だが、「学長挨拶・乾杯」と「電報紹介」のプログラムでは、「誘導」、「カメラ」、「GM」、「VO」という4つの担当への指示が書かれている。「誘導」というのは、誘導の担当である。ここでは学長が舞台上へと出て行くときに送り出すことになっている。「カメラ」は、カメラ操作係である。カメラで撮影している映像は舞台上のスクリーンに同時に映し出される仕組みになっているが、「学長撮影」して学長を映し出す

T. time	Program	P. time	Sound	MC	Mic	Stage Action	Staff Action	Light
15'00"	学長挨拶 乾杯	3'00"		アナジリ3 「学長先生、お願い致します」	①●● ④●● ⑤学長		誘導：アナジリ3後、学長を ステージへ カメラ：学長撮影	8：6 (PS)MC (PS)学長
16'00"	電報紹介	1'00"		アナジリ4 「それでは、パーティー をお楽しみください」	①●● ④●●		GM：フラワ下そで誘導完了 VO：Vに切替、学外VLスタ ンバイ	8：6 (PS)MC

図4 キューシートの一部

ようにという指示がある。「GM」は「ゲストマネージャ」のことである。「電報紹介」のつぎのプログラムに登場する「フラワーアーティスト」を「下そでに誘導（完了）」しておくことになっている。そして、「VO」は「ビデオオペレータ」である。スクリーンに映し出される映像を、それまでのカメラ入力から切り換えて、「学外関係者からのビデオレター（学外 VL）」を始められるように「スタンバイ」せよという指示がある。

9 列目の「照明」は照明担当者への指示である。1 行の「8:6」というのは、舞台上と客席の照明の光量を示す。最大光量が「8」で、「8:6」というのは舞台上の照明は最大光量、客席は8段階中6にするとということだ。そして、「PS」はピンスポット照明のことだが、これを、舞台上の MC と学長にそれぞれ当てるという指示である。

つぎに、「MC」列を説明しよう。引用符に入った「学長先生、お願い致します」というのは MC が言うべきセリフである。これをどのタイミングで言うのが問題となるが、これは「サウンド」列から読み取ることができる。折れ線は音量を示している。右が大音量で左側のマス線が無音を示す。プログラム部分の始まりでは大音量だった音楽が間もなく極小音量とするようにというのが、この折れ線の意味だ。この音量が小さくなったところで MC はセリフを言うといった理解が共有されている。

最後に「アナジリ」ということばについて説明しよう。これは、「アナウンスメント」の「尻」から来ているようだが、当事者たちに聞いてもその語源ははっきりしない。グーグル検索してみたところ、「アナウンスの最後の部分、おもに録音番組などで、トークを締める時間のこと。進行表に「アナ尻 28 分 30 秒」などと書かれている。」

とある (<http://www.1530radio.com/industry/industryword1.html>; 2012 年 10 月 27 日アクセス)。ここでは転じて、アナウンスが終わったところでなにかのアクションをするタイミングを指すものとして使われている。「スタッフアクション」の「誘導：アナジリ 3 後、学長をステージへ」という記述は、「学長先生、お願い致します」という MC のアナウンスが終わったタイミング（尻）で、誘導担当は舞台袖から学長を舞台中央へと送り出すということだ。

Q ディレクタによると、放送部も照明担当も「慣れている」専門家集団であり、図 4 のような記述を見れば、それだけで期待された動きができるということだった。対照的に、誘導や GM はパーティ実行委員会の部員が務めるため、それほど習熟度が高いわけではない。習熟度に個人差がある動きを、大勢の人間が同時並行的に適切な順番とタイミングで行うことによって、パーティというイベントは成り立つ。キューシートは、この協調を達成するために必須の人工物 (artifact) と呼べる。キューシートの作成は、ディレクタの意思決定のひとつの結晶と位置づけることができる。

リハーサルにおいてディレクタは中心的な役割を果たす。まさに協調の中心である。だが、本番のパーティにおいては、いくつかの場面でインカムを通じてキュー出しをするだけの存在へと引き下がる。つまり、中心不在の協調が目指すところ、完成形である。これは、さらに興味深い点である。リハーサルは、中心主導の協調から中心不在の協調へと移行していくための練習と位置づけられる。つぎにその場面を見ることにしよう。

5 アナジリにタイミングを合わせる練習

本論が分析対象としているのは、6 日間行われ

た事前リハーサルの4日目である。この日は、プログラム終盤の「チアリーダー演技」と「エールと校歌斉唱」部分のリハーサルが行われた。本番が1週間後に迫っていたが、応援団とチアリーダーの演技内容がまだよくつかめていなかった。Qディレクターはそのために、前夜チアリーダーの代表に電話をかけて、その動きを確認した。そして、この日の朝になってその部分のキューシートを書き上げた。そのために、午前10時の開始予定時刻がきてもリハーサルは始まらなかった。ディレクターがキューシートを手書きで作っていたからだ。配布用のコピーができあがり、ようやく関係者（「GM、下コマ、MC、照明さんと、あと、放送部さん」）を集めてのミーティングがまとまったのは15分ほどすぎだった。

以下、本論ではこの日の最初のリハーサルを見ていく。それは、Qディレクターのことばによると、「え：実際に流しながら、マイクでおれ説明しつつ、全員に教えるんで、それで動き把握してください」というようなものだった。「動きを把握」するためのものであり、「リハーサル」のほんの始めの一步ということだろう。だからこそ、「協調」の失敗などが見られて研究上興味深いものとなっている。それでも、やり直しをその場で行うものとそうしないものがあるという興味深い違いが見られた。

以下の断片1は、この日のリハーサルで初めてアナジリが出てくる場面である。まず「チアリーダーの演技」プログラムが行われたあと、当初のキューシートでは「エールと校歌斉唱」となるはずだったが、「メドレー」というプログラムが新たに入ることになる。この「メドレー」のメインで団長が登場してくる部分である。図5はその部分のキューシートの「Sound」と「MC」列である。「エキサイティングフィールド」というのは

「メドレー」を始めるときの発声のようだ。団長がこれを叫んで、その最後の「ド」を合図にアナジリをするというのである。

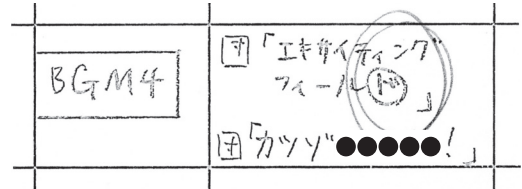


図5 メドレー部分のキューシートの一部（手書き）

断片1 アナジリの練習 [Bcam 00:42:57.29]⁵⁾

- 01 ディ：はいるまえに、インカムとばしてく
02 ださい。おねがいしま：す。
03 (ステージ上は暗くてみえないが団長登場か)
04 ディ：でピンスポ。つけてください。
05 (団長が3歩ほど入ったところでピンスポ点灯)
06 ディ：で、はいつて、くるんで、
07 (団長が中央へ歩くのをピンスポが追う)
08 ディ：で、まんなかで、はい。
09 (団長が正面を向く)
10 ディ：そこでストップで。
11 ディ：でそこで：エキサイティングフィー
12 ルドが、アナジリでやります。ひと
13 こと、おねがいしま：す。
14 団長：はい。きょうもリハがんばりましょ
15 う。いきま：すエキサイティング
16 フィ：：ルド：：
17 (舞台照明点灯)
18 ディ：で、この「ド」のタイミングで、
19 BGM4が再生です。
20 (音楽始まる)
21 (団長が手を振り出す)

応援団長役の女性（以下、「団長」）は舞台下手から登場する。その担当者である下コマ（下手コ

マンダ)にたいして、ディレクタは団長が「はいるまえに、インカムとばしてください」と指示している(01-02行)。インカムを聞いたピンスポット照明担当(「ピンスポ」)が、入場に合わせて点灯するためだ。ビデオ画面上では見えないが、団長が登場してくるのがディレクタからは見えたのだろう。「でピンスポ、つけてください」とディレクタが指示する(04行)。その声に応じるようにピンスポット照明が点灯されるが、すでに団長は3歩ほど舞台上に入っているところだ(05行)。

団長は舞台中央に置かれたマイク前まで来ると正面を向く。「そこでストップで」というディレクタの指示(10行)は、動作の後追いになっている。そして、「でそこで：エキサイティングフィールドが、アナジリでやります。ひとこと、おねがいしま：す」と指示をする(11-13行)。

ディレクタの「ひとこと」がそういう意図だったのか、「きょうもりハがんばりましょう」(14-15行)と言ってから、団長は「エキサイティングフィ：：ルド：：」と発声する(15-16行)。「ド」を強調して大きな声で発声しかなり長く伸ばしているのが目立つ。舞台の照明はここで点灯される。アナジリにうまくタイミングを合わせることができた。だが、同時に始まるべきだった音楽は始まらない。それで、ディレクタが「で、この「ド」のタイミングで、BGM4が再生です」(18-19行)と言ったところで音楽が始まる(20行)。そして、団長は「メドレー」の模倣だろうか、腕を振り出す(21行)。

「エキサイティングフィールド」のアナジリで、照明が点灯され音楽再生が開始されるというのがディレクタの意図であり、照明のほうはうまくいった。だが、音楽はうまくいかなかったので、ディレクタが声で催促している。「失敗」の

例だがここではそれを問題にすることなく、リハーサルはつぎの部分へと進められた。

いずれにしても、アナジリにタイミングを合わせることがうまくいけば、ディレクタのキューなしに場面が転換する。つまり、応援団長の発声のお尻でメドレーと呼ばれる演技へと移行していく。本番では、「ド」の発声に合わせて、照明が点灯されて音楽が始まるという中心不在の協調によってこれが実現されることになる。

6 「ちょっといっかいやってもらえる？」

つぎに、やり直しが行われた部分を見ていく。今回取り上げているリハーサルが、「動きを把握」することを目的としたものであることは5節でも述べた。「エキサイティングフィールド」のアナジリでは、音楽が始まらないという失敗があったが、やり直しはなかった。だが、この部分の直前のところではやり直しがあった。この日用のキューシートでは「メドレー準備」とされていた部分である。

断片2の01行は、直前のプログラムである「チア演技」が終わってチアリーダー(の代役)たちが退場した時点である。舞台上は暗転している。応援団のリーダーが出てきて、マイクを使って一言アナウンスする場面が始まるころだ。この部分をここでは「リーダー登場」と呼ぶことにする。

断片2 「ちょっといっかいやってもらえる？」

[Bcam 00:40:17.10]

- 01 (チアの5人目が退場しおわる)
 02 ディ：で、退場しおわったら、BGM てえ
 03 し。
 04 下コ：(スタンドマイクを持った下コマが

05 出かけて、引き返す)

06 《音楽止まって暗転》

07 ディ：で、ここで下コマがスタンドマイク

08 設置。

09 《壇上は暗くてよく見えない》

10 ディ：で、え：：、

11 ディ：《キューシートをのぞきこんでいる》

12 ディ：でこれ-

13 ディ：《左耳に手をあてて聞いている様子》

14 ディ：《右手に持ったマイクを口元から下

15 ろして》

16 ディ：聞こえない。

17 ディ：《左耳からインカムのイヤフォンを

18 はずして卓上に置く。そして、イン

19 カムを左手で取る》

20 ディ：でこのタイミングで、え：いま、

21 インカムくれたよねえ。

22 下コ：(3.0)

23 ディ：下コマ、

24 下コ：はい。

25 ディ：まあ、それで：、

26 ディ：《教室後方に向かって》いま、

27 ピンスポさん聞こえました？

28 《ピンスポが当たる》

29 ディ：ピンスポさんいまあもう、インカム

30 聞こえました：？

31 P S：聞こえてないです。

32 ディ：ごめん、聞こえなかったから、も

33 っかいおねがいしますあもう、

34 (4.5)

35 ディ：下コマがええっと：、はい、(2.0)

36 はいおねがいしま：す。

37 ディ：で、ここ、

38 《リーダーが出てきてピンスポがあたる？

39 ディ：ん。たぶんほん、本番は会場が広く

40 て：、くらくて遠くてあの：：、ピ

41 ンスポさんの位置からはいったかど

42 うかわかんないとおもうから：リー

43 ダーにかんしては：、え：入場しま

44 した、でインカムと、とばしてくだ

45 さい。ちょっといっかいやってもら

46 える？

47 下コ：《下手に退場しながら》は：い。

48 ディ：ごめん、し、で、リーダーはいって

49 ください。

50 《リーダーが入ってくる。ピンスポはつかない》

51 ディ：で、このタイミングで、

52 《ピンスポ点灯》

53 ディ：はい。

54 ディ：《教室後方に向かって》でまあイン

55 カムとぶんでそのときに、あの：ピ

56 ンスポさん、

57 ディ：《ステージに向いて》ピンスポあて

58 てください。

59 P S：はい。

60 ディ：でえ：、リーダーさんおねがいしま

61 す。メドレーやりましょう。

まず、下コマがスタンドマイクを設置する。そして、リーダー役の下コマが登場する（下コマは3人いる。スタンドマイクを立てた下コマとリーダー役が同一人物であるかどうかは、画面からは確認できない）。登場と同時にピンスポット照明が当たる。そして、リーダー役が「これからメドレーを行います」とアナウンスする段取りだ。これがうまくいかずに2回やり直しているのが断片2である。32-33行の「もいっかいおねがいします」と、45-46行の「ちょっといっかいやってもらえる？」とが、やり直しを指示する発話である。

表2 断片2の「リーダー登場」とやり直し指示の関係

	開始の 行番号	ディレクタの発話	やり直しの 回数	やり直し指示の 開始行番号
1回目	20	「でこのタイミングで、」	1回目やり直し	32
2回目	37	「で、ここ、」		
		[T1]	2回目やり直し	45
3回目	51	「で、このタイミングで、」		

断片2では、「リーダー登場」が3回行われている。そして、ディレクタのやり直し指示は2回あった。だが、2回目のやり直し指示は「リーダー登場」のパフォーマンスと直接対応していない。その関係を表2に示す。

1回目のやり直しにつながった失敗は、まったくの失敗だった。ピンスポット照明が点灯したとき(28行；図2はこの時点のもの)には、そこにいるべきリーダー役がいなかった。Qディレクタが「でこのタイミングで」と言っている20行の時点で点灯されるべきだったと思われる。それで、うまく同期が取れなかった原因が究明される。「これからリーダーさん入ります」というキューが、インカムを通じて下コマから「ピンスポさん」へと伝えられることになっているのだが、それがうまく「聞こえてない」(31行)。「ごめん、聞こえなかったから、もいっかいおねがいます」とことばやわからかにやり直しを指示している(32-33行)。

2回目のやり直しは、明白な失敗とは思えないところで指示されている。38行でピンスポット照明が点灯したときには、舞台上のリーダー役に当たっている。やり直しとなる明瞭な理由は見当たらない。だが、その後続く発話(39-45行)は興味深い。言いよどみなどを除いて発話をまとめると以下のようなになる：

T1 断片2の39-45行の発言要約

たぶん、本番は会場が広くて暗くて遠いので、ピンスポ照明担当者の位置からは舞台上にリーダーが入ったかどうかはわからない。だから、「リーダーさんが入場しました」と下コマは、インカムでピンスポ照明担当者さんに知らせてください。

ディレクタはマイクを使ってこれをしゃべっている。そのために、発話の宛先(address)となりうる人間は多くいることになる。だが、舞台下手を向いているからだの向きと指示内容から下コマにあてているのは明らかだ。そして、この発話は相手を説得しようとしているように聞こえる。推測になるが、35-36行のところでインカムのイヤフォンを通じて、ディレクタはなにかを聞いている。35行の「はい」は話しかけられたことへの応答と思われる。続く2.0秒の間は聞いている間だろう。そして、36行の「はい」は受けとめだろう。そのうえで、「おねがいます：す」と、相手がなにかをやろうと提案していることを受け入れ、それを実行するように「おねがい」していると聞くことができる。そして、こう理解すると、34行の4.5秒の間も、実はインカムを通じて言われていることをディレクタが聞いている間として見えてくる。

もし、39-45行の発話(T1)が下コマから言われたなにかへの応答であり、リーダーが入った

ことをインカムでピンスポット照明担当者に知らせるという自分の指示の根拠を述べるものであるとするならば、もとの下コマの発話は以下のようなものと考えられるだろう：「ピンスポット照明担当者から舞台にリーダーが出ていくのは見えるだろう。だから、わざわざインカムで知らせる必要はないのではないか。」

聞こえていない発話内容を推測しての議論を行ってきた。あまり望ましいことではないが、2回目のやりなおし指示（45-46行の「ちょっといっかいやってもらえる？」）が、T1の発話の「流れ」で生じているように見えるからこそあえて推測を提示した。2回目の「リーダー登場」が明白な失敗ではないにもかかわらず、やり直しをわざわざここで指示したのは、下コマがリーダー入場をインカムで知らせるという自分の提示する手順をある意味徹底させるためであったという可能性を主張するためだ。

この主張を支持するものとして、やり直しとならなかった3回目がどのようなものだったかをつぎに検討しよう。リーダー役の下コマが退場すると、ディレクターはすぐに入るように指示する（48-49行）。リーダーは舞台に登場するが、ピンスポット照明は当たらない（50行）。ディレクターがマイクで「で、このタイミングで」と言う（51行）のに応じるように点灯される。

実は、「うまくいった」と記述したが、2回目のときも「で、ここ」というディレクターの発話（37行）があって、ピンスポット照明が当たっている。3回目の「で、このタイミングで」（51行）のほうが、ディレクターがしゃべりだしてから照明がつくまでが長い。にも関わらず、3回目のあとはやり直しをすることなく先の部分へと進んでいる（60-61行）。

そうは言うものの、ただ「問題なし」としてい

るわけでもない。54-58行に、再度手順を確認するような発話を行っている。また、「でまあ」という54行の発話冒頭部は、「この程度でしょうか」といった譲歩のようなニュアンスを読み取ることもできる。そのような再確認が必要なパフォーマンスだったにもかかわらず、つぎに進行していったということを見てとることができる。

7 ディレクターのアセスメントワーク

ディレクターのワークとはどんなものだろうか。

6節では、なにをすべきかの指示をディレクターが行っているのをみた。スタンドマイクを設置する、「いまリーダーさんが入りました」とインカムで知らせる、ピンスポット照明をリーダーに当てるといったことだ。しかも、それを、どのタイミングで行うかも指示していた。

また、「やり直し」の指示もしていた。「もいっかいおねがいします」（32-33行）と、「ちょっといっかいやってもらえる？」（45-46行）である。どちらも、「やれ」や「しなさい」といった命令形の強い口調ではなく、「おねがいします」という依頼形や「やってもらえる？」と相手の意向を尋ねる疑問形で表現されている。しかし、次の部分の練習（リハーサル）へと進行するのではなく、同じ部分をもう一度やるという指示であり、直前のパフォーマンスがやり直しを要するような「失敗」であったというアセスメント（査定）が明示的ではないものの示されている。

相互作用におけるアセスメントについては、Hugh MehanのI-R-E（initiation-response-evaluation）連鎖が有名である。「正解です。良く出来ました」といった教師の「評価」が教室場面に特徴的であり、教室でよく見られる連鎖を「教育」的なものとしている（Mehan 1979a; 1979b; 南 2010）。評価（evaluation）と査定（assess-

ment ; Pomerantz 1984) のそれぞれの定義, あ
るいは両者の異同を論じる用意は本論にはない。
ここでは, やり直しを指示するということのなか
に, 直前のパフォーマンスはうまくいかなか
った, すなわち失敗であるという査定がなされてい
ると考えておくことにする。

特に, やり直しを指示するディレクタの発話で
「もっかい」という表現にまず注目しよう。「も
う一回 (once more)」の意味である。いまなさ
れたのと「同じ」ことを「もう一回」やるとい
うことが指示・提案されている。厳密に言う
と、「いまなされたこと」ではなく、「いまやろうと
したこと」と言うべきだろう。「やろうとした」
ことがうまくいかなかったから、「もう一回」やる
必要があるのだ。

つぎに, やり直しの指示ではない発話との対
比を行っておきたい。断片2では, 「で,」でディ
レクタの発話が始まるのが目につく。たとえば, 02
行の「で, 退場しおわったら, BGMでえし」や
07行の「で, ここで下コマがスタンドマイク設
置」といったところである。ほかにも, 10行,
12行, 20行, 37行, 48行, 51行, 60行に同じ
「で」が見られる。これは, 直前までのパフォー
マンスが十分なものであり, つぎの部分に移行し
ていくということをマークしているものと解釈で
きる。

それにたいして, 2回のやり直しの指示は,
「で」では始まっていない。32行のものが「ごめ
ん」で始まっているのはとくに対照的だ。やり直
しを指示するのに, 「謝罪」をして, その理由
（「聞こえなかったから」）を提示してから指示を
出している⁶⁾。45行のやり直し指示は, 明確な
「謝罪」はないが, 「ちょっと」と始まっている。
これには, 「ちょっと待って」と「ちょっと
だけ」と2つの可能性が考えられる。後者だとや

り直しはたいへんなことかもしれないが, それを
我慢してやってもらいたいという意味が生じてく
る。そうだとすると, 1回目の「ごめん」に通じ
る要素とすることができる。

54行目の「でまあ」は, 6節の最後にも取り上
げた。次への進行を促す「で,」に「まあ」が組
み合わさったものである。やり直しはせずに次に
進むが, 十分に満足できるものというわけではな
く, ピンスポット照明担当者への指示をくり返し
ている。マイクを使っているのだから聞こえてい
るのだが, 54-56行でディレクタがX教室の最
後尾にいるピンスポット照明担当者に向かって話
しかけているのが印象的である。これに, ピンス
ポット照明担当者も大きな声で「はい」と応答し
ている (59行)。

ディレクタのアセスメントは, 「いいね」や
「よくできました」といった発話を通じて明示的
に行われているものではなかった。「で」という
短い発話で, つぎに進むことで示されていた。あ
るいは, やり直しを指示しないというかたちで否
定的に行われていたというのが適切かもしれな
い。

この場面の特徴として, 「失敗」がディレクタ
のみならず, ピンスポット照明担当者や下コマと
いった「指示される」人間にとっても見て取るこ
とができるものであったという点を最後に指摘し
ておきたい。ディレクタのアセスメントの規準が
みんなに「透けて見える (transparent)」とい
うわけだ。ディレクタのアセスメントが恣意的であ
り, その地位に基づいてやり直しを命じていると
いった, リーダー像とは相反する姿である。

8 失敗原因の究明

ディレクタのワークのひとつとして, パフォー
マンスがうまくいかなかったときに, その部分の

やり直しを指示することで、アセスメントを提示しているということを前節でみた。

つぎに、失敗の原因を特定するワークをみておこう。これは、断片2の1回目の失敗後のやりとりで見られる。ここでは、7節でも述べたが、舞台上にリーダーが出てきたときに当てられるべきピンスポット照明がうまく当たらず、ピンスポット照明が当たったところにはリーダーはいなかった(28行)。その原因を特定しようというものだ。原因としては、「いま、リーダーさんが入ります」という下コマのキューが、インカムを通じてピンスポット照明担当に伝わらなかったということが考えられる。

「聞こえてないで：す」(31行)とピンスポット照明担当が答えて、「聞こえなかったから」(32行)という失敗の原因が特定される。そしてやり直しとなるのだが、そもそもここまでにかなりの時間がかかっている。「でこのタイミングで」という20行のディレクタの発話は、ピンスポット照明が当たるべきタイミングを示しているようだ。だが、下コマのインカムを通じてのキューがあったかどうかははっきりしない。「いま、インカムくれたよねえ」(20-21行)と確認するようにディレクタは尋ねているものの、そのまえのところでは、「聞こえない」と独り言のようにつぶやいて(16行)インカムのイヤフォンを左耳からはずして卓上に置いている(17-18行)。つまり、下コマからのインカムのキューがあるべきときに、ディレクタはそれが聞ける体勢ではなかった。

だからこそ、インカムでのキューがあったかどうかをディレクタは最初に下コマに確認する(20-21行)。そして、下コマの「はい」(24行)という回答を待ってから、ピンスポさんに聞こえたかどうかを尋ねている。

これまで見てきたように、当たるべきときにピンスポット照明が当たらなかった原因が、インカムでのキューがうまく聞こえなかったことであると特定している。この通信がうまくいけば、同期がうまくいく。この点に気を付けてやり直そうと提言している。つまり、失敗原因を特定することで、やり直しにおいて留意すべき事項が明確化されている。複数の人間の協働によって達成される活動は、失敗の原因がひとりひとりでは見えないことがある。協調の中心であるディレクタにとっては、失敗原因の特定も重要なワークであることが示されている。

9 失敗への対応としての配慮ワーク

前節では、インカムの不調が失敗の原因であると特定することで、やり直しをする事例を見た。裏を返せば、インカムという情報通信機器によって、複数の人間が協調し同期するということが可能になっているということだ。

機器が関係するやりとりで興味深い事例をもうひとつ最後に取り上げる。それは、断片3である。分析に際してこのクリップを見ていたとき謎だったのは、23行の「ごめんね」というディレクタの発話である。

断片3 「ごめんね」

[Acam 00:45:16.05]⁷⁾

- 01 ディ：で：、つぎは、とりあえず、マイク
02 なしで、(1.8)
03 《卓上を見る》
04 やるんで、お願いしますね。
05 ディ：《マイクを卓上に置く》
06 《略；約1分7秒》
11 ディ：GMオッケー？
12 MM：《あわてて操作する》

- 13 MM：あっ
 14 GM：オッケーで：す=
 15 ディ：=はい：：：
 16 SD：(ふふとMMに笑いかける)
 17 (10.0)
 18 ディ：じゃ、やってくんで、おねがいし
 19 ま：す。
 20 ディ：(左手に持ったマイクを卓上におく)
 21 ディ：(ふふふと笑いながら)
 22 ディ：(図2のようにMMをつついて)
 23 ￥ごめんね￥ hhh
 24 MM：すいません。

断片3は、カメラAの映像から作成したものである。ディレクタはワイヤレスマイクをつけており、その発話はすべて録音されている。

リハーサルは広い教室で行われており、リハーサル中ディレクタは部屋中に聞こえるスピーカにつながったマイクを使って全員に指示を出している。ただし、本番と同じようにインカムで指示を出すべきところ(たとえば、「チア前振りまで、3, 2, 1, キュー」といったもの)では、インカムを使っていた。

ディレクタが使っているマイクのほかに、MCが使っているマイクの音量を調節するのが、ディレクタの横に位置するマイクミキサー(MM)である。ひとの発話も音量が安定しないために、それを調節するのがマイクミキサーの仕事だが、使わないマイクのインプットがスピーカに出力されないように絞っておくこともする。

断片3の謎だが、この同じ部分のカメラBの映像を見ると解ける。ディレクタがマイクに向かって発話しているが、マイク音量が入っていないためにみんなに聞こえていないところが2箇所ある。「GM オッケー？」(11行)と「じゃ、やっ

てくんで、おねがいしま：す」(18-19行)である。

まず1箇所目だが、ディレクタはゲストマネージャ(GM)の準備ができるのを待っている。準備ができたところでリハーサルを始めることになっている。これは、前節までに見た、1回目の通しリハーサル(断片1と2のもの)が終わって、担当者が集合してその問題点の確認などの打合せが終わったところである。「つぎは、とりあえず、マイクなしで、やるんで、お願いします」(01-04行)とかなり切れ切れに話している。とくに、1.8秒の間があって卓上を見ている。キューシートを確認しているのかもしれない。ここはもちろんマイクの音量は入っている。これが終わった時点で、マイクを使わないと言われて、マイクミキサーはディレクタが使っているマイクの出力を絞ったのだろう。

この後(06行)、ゲストマネージャのひとりがディレクタに相談に来る。壇上に送り出す代役の動きを確認するためだ。かれが戻っていったあとに待ち時間ができる。その間ディレクタは、横に座っているサウンドディレクタ(SD)とおしゃべりをする。本来マイクミキサーを担当する予定だった人間が来られなくなり、この日は代役が務めている。休んでいる放送部員はインフルエンザに罹患したと聞いたがそうか。また、これから治って出てきて、本番まで間に合うだろうかといった話題である。

この話題が切れたところで(この間約1分7秒)、舞台に目をやったディレクタがあわててマイクを取り上げて、「GM オッケー？」と聞いたのが11行目である。マイクミキサーは、ディレクタとサウンドディレクタのあいだに座っていたが、2人のやりとりにははいらず、なにか卓上かマイクミキサー装置かを気にしていた。それで、

「GM オッキー？」のまえにマイク音量を上げることができなかった。「あっ」と言って急いで音量を上げる。GM からの肉声での「オッキーです」(14行)という応答を「はい：：」(15行)とディレクタが受けとめる「い」からマイク音量が入って、教室全体で聞こえるようになっている。

このあと、ディレクタはマイクをいったん卓上に置く。そして、左耳にイヤフォンをつける。インカムのものだと思われる。上着の袖をまくるようなしぐさをする。今度もおもむろにマイクを取り上げて「じゃ、やってくんで、おねがいしま：す」(18-19行)とリハーサルの開始を宣言する。今度も不意を打たれたマイクミキサーが操作をして、スピーカにマイクの声が反映されるようになったのが「ま：す」という発話の最後のところである。

2回も不意打ちが生じたためだろうか、ディレクタはマイクミキサーの腕に触りながら「ごめんね」と謝っているのが23行(図3)である。自分でもおかしいのか笑い声での発話となっている。マイクミキサーもサウンドディレクタも笑っている。メンツをつぶされたとまで感じているとは思えないが、マイクミキサーをあわてさせることになった。その点についての「ごめんね」であろうか。いずれにしても、なにも言わないでおくのはマイクミキサーも気を悪くするような出来事だ。自分の動きを直接サポートしてくれている人間にたいして配慮を示すのも、ディレクタの重要なワークのひとつだろう。

ディレクタのふるまいが適切なものではなかったのは、適切なふるまいとの対比からも確認できる。この2回の不意打ちのまえのところでは、ディレクタは、「マイクもらえますか」や「マイク、もうちょっとあげてもらっていいですか」な

どと、明示的にマイクに関する注文を出している。時間に追われていたとはいえ、それをしなかったことでトラブルを生み出したのは自分の責任だと示すうえでもこの「ごめんね」は重要なものであった。

10 協調の中心としてのディレクタ

本論では、パーティリハーサルにおける協調の中心としてのディレクタのワークを見てきた。アナジリという仕組みの使用をキューシートで計画し、練習することで協調の同期性を確保しようとしていた。協調の同期がうまくいかないときには、やり直しを指示することで、そのアセスメントを示していた。情報通信機器というブラックボックス的なツールをめぐるトラブルにも適切に対応してリハーサルのスムーズな進行に努めていた。

空間と時間において分散している活動を協調させる中心として、[空港] 管制室はそのデザインにおいて、共同(joint)ワークと分業、すなわち、ひとつの焦点にみんなが着目することとそれぞれのワークスペースが分化されていて断続されて秩序化されていること、という相反する必要性を示している(Suchman 1996: 57)。

空港管制室を調査したSuchmanは、チームで協調の中心を務める様子を描き出した。対照的にパーティディレクタは、ひとりでそのはたらきを担っていた。

パーティディレクタの特徴としてさらに興味深いのは、本番においてその存在がさらに後景に退行することだ。リハーサルという練習においては、ディレクタは中心的役割を果たして「陣頭指揮」をしていた。だが、本番ではいくつかの場面

でインカムを通じてキュー出しをするぐらいしかすることがない⁸⁾。リハーサルで磨き上げた協調がアナジリという仕組みによって作動する。中心不在の協調がその完成形であった。

注

*本論文は、成城大学特別研究費による研究プロジェクト「教育コミュニケーションにおける「査定」の相互作用分析」(2011年度)の研究成果である。調査に協力してくれたP大学卒業記念パーティ実行委員会の人びとには記して感謝する。本論で使用した録画断片は、ビデオデータセッション研究会(2012年5月12日成城大学)で提示し、多くの貴重な示唆とコメントを受けた。特記したほかにも数え切れないほどである。感謝の意を表す。なお、この団体では「パーティー」という表記が採用されているが、本論文においては「パーティ」に統一した。

- 1) 部員へのインタビューはリハーサル時にはできなかった。半年後に、立て看板作り作業を調査したときにインタビューした数人の回答による。
- 2) 協調の中心としてのディレクタという考え、Suchman 研究の紹介、さらには本番では背景に引くといった点にいたるまで、データセッション研究会において酒井信一郎氏から教示を受けた。記して感謝する。
- 3) 2人の人間のあいだの相互作用において、それぞれの動きが同時発生する現象(synchony)については、Kendon(1970)の研究が示唆に富む。Kendonによると、「相互作用上のシンクロニー(interactional synchrony)という現象は、つまり、聞き手の行動フローが話し手の行動フローと協調されているというもの」(1990: 92)であるが、これを最初に記述したのはCondon & Ogston(1966)である。
- 4) Qディレクタの書き込みもあるが、それは省いている。

- 5) トランスクリプトの凡例は以下である(Jefferson 2004; 西阪 2008: 9-13):

- [複数の参加者の発する音声为重なり始めている時点は、角括弧 ([]) によって示される。
- = 2つの発話が途切れなく密着していることは、等号 (=) で示される。
- () 聞き取り不能な箇所は、() で示される。空白の大きさは、聞き取り不可能な音声の相対的な長さに対応している。
- (言葉) 聞き取りが確定できないときは、当該文字列が () で括られる。
- (m.n) 音声が発絶えている状態があるときは、その秒数がほぼ0.2秒ごとに () 内に示される。
- (.) 0.2秒以下の短い沈黙は、() 内にピリオドを打った記号、つまり (.) という記号によって示される。
- 言葉 : : 直前の音が延ばされていることは、コロンで示される。コロンの数は引き延ばしの相対的な長さに対応している。
- h 呼気音は h で示される。h の数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
- .h 吸気音は .h で示される。h の数はそれぞれの音の相対的な長さに対応している。
- () 発言の要約や、その他の注記は二重括弧で囲まれる。
- 言葉 音の強さは一重下線によって示される。
- 言葉 それまでスピーカを通じてなかった発話だが、スピーカを通じて聞こえるようになった部分は二重下線で示される。
- ¥ ¥ 発話が笑いながらなされているわけではないけれど、笑い声でなされているということがある。そのときは、当該箇所を ¥ で囲む。
- . , ? 語尾の音が下がって区切りがついたことはピリオド (.) で示される。音が少し下がって弾みが付いていることはカンマ

- () で示される。語尾の音が上がっていることは疑問符 (?) で示される。
- 6) 「で」が、直前のパフォーマンスに問題なく、次の部分へと直ちに進行するときに限定して使われていることは、データセッション研究会において秋谷直矩氏から教示を受けた。記して感謝する。
- 7) カメラ A での開始部分のタイムコードを示しているが、この部分のトランスクリプト作成ではカメラ B の映像と音声も参照した。本文の分析に見られるように、これは不可欠のことであった。
- 8) 実際の本番ではこのようにはいかなかった。パーティ開始時刻の遅延とプロジェクタの不調といった、ディレクタが対応を迫られる事情が生じたからだ。

文献

- Condon, W. S. & Ogston, W. D. 1966. Sound film analysis of normal and pathological behavior patterns. *Journal of Nervous and Mental Disease* 143: 338-347.
- Goffman, E. 1959. *The presentation of self in everyday life*. Doubleday.
- Goffman, E. 1963. *Stigma: Notes on the management of spoiled identity*. Prentice-Hall.
- Goffman, E. 1974. *Frame analysis: An essay on the organization of experience*. Harvard University Press.
- Heath, Christian, Hindmarsh, Jon, & Luff, Paul. 2010. *Video in qualitative research: Analysing social interaction in everyday life*. Sage.
- Jefferson, G. 2004. Glossary of transcript symbols with an introduction. In Lerner, G. H. ed. *Conversation analysis: Studies from the first generation*. John Benjamins, 13-23.
- Kendon, A. 1970. Movement coordination in social interaction: Some examples described. *Acta Psychologica* 32: 100-125. In Kendon 1990. *Conducting interaction: Patterns of behavior in focused encounters*. Cambridge University Press. 91-115.
- Mehan, H. 1979a. What time is it, Denise?: Asking known information questions in classroom discourse. *Theory into Practice* 18: 285-294.
- Mehan, H. 1979b. *Learning lessons: Social organization in the classroom*. Harvard University Press.
- 南 保輔. 2010. 教育コミュニケーションと評価. 『*成城教育*』146: 4-9.
- 南 保輔. 2011. ロボットラボにおけるコミュニケーション: 意思決定と教育コミュニケーション. 『*コミュニケーション紀要*』22: 1-22.
- 南 保輔. 2012. 成績評価における相互作用: 「変わった」確認ワークの分析から. 広田他編『*現代日本の少年院教育: 質的調査を通して*』320-342.
- 西阪 仰. 2008. トランスクリプト (転写) の記号一覧. 西阪; 高木 智世; 川島 理恵『*女性医療の会話分析*』文化書房博文社. 9-13.
- Pomerantz, A. 1984. Agreeing and disagreeing with assessments: Some features of preferred/dispreferred turn shapes. In Atkinson & Heritage eds. *Structures of social action: Studies in conversation analysis*. Cambridge University Press. 57-101.
- Roberto, M. E. 2005. *Why great leaders don't take yes for an answer: Managing for conflict and consensus*. Wharton School Pub. = マイケル・A・ロベルト. 2006. 『*決断の本質: プロセス志向の意思決定マネジメント*』スカイライトコンサルティング訳. 英治出版.
- Suchman, L. 1996. Constituting shared workplaces. In Engeström, Y. & Middleton, D. eds. *Cognition and communication at work*. Cambridge University Press. 35-60.
- Suchman, L. 1997. Centers of coordination: A case and some themes. In Resnick, L. B., Saljo, R., Pontecorvo, C. & Burge, B. eds. *Discourse, tools, and reasoning: Essays on situated cognition*. Springer. 41-62.

Micro Ethnography of a Party Rehearsal: Focusing on Work of the Party Director

Yasusuke MINAMI (Seijo University)

yminami@seijo.ac.jp

<http://weblab.seijo.ac.jp/yminami/index.html>

ABSTRACT

What is going on at party rehearsals? What kind of work do the party directors achieve? What forms do their assessments take? In order to inquire into these research questions, rehearsals of a party to celebrate commencement at a University in Japan were video recorded and studied.

The party director's decision making process was crystalized in the form of the cue sheet. For the party to be a success, spatially distributed people needed to coordinate and achieve synchronization of their actions. One of the mechanisms utilized is called *anajiri*, which means the end (bottom) of the announcement. Assessments of the director were implied in his order of repeating certain portions of the agenda, which indicated that the previous performance was not satisfactory. The director also specified the cause of failures, determining whether the failure was due to the malfunction of the radio communication system or another type of problem. By conducting this work, the director was serving as the center of coordination.

KEY WORDS: decision-making, center of coordination, synchronization, assessment, frame analysis, workplace study, conversation analysis, video recordings